

武士道を探る (1)

「武士」の誕生から江戸時代まで

渡 邊 朋 雄

Historical Consideration on the Origin of “Bushido”
—From the time of the Birth of Warriors to the Edo era—

Tomoo WATANABE

(2005年12月 2 日受理)

1. はじめに

台湾の李登輝前総統が執筆した『「武士道」解題』が日本人に好まれ、新渡戸稲造の「武士道」が、映画「ラストサムライ」(2003年)の影響もあってか、数社から百万部以上出ている¹。数年前から、日本は「武士道」ブームである。

映画「ラストサムライ」は、ハリウッドが、映画市場として有力な日本をターゲットに、「武士道ブーム？」に敏感に反応して製作された作品であろう。ただ、日本を題材に選んだ過去の映画よりも、登場する「武士」たちの立ち居振舞いや、維新直後の日本人の生活風景等が、比較的良く考証されていたこともあって、多くの日本人がこの映画を観て触発され、「武士道」あるいは当時の「日本の精神文化」とは何かを考え始めたのではないかと考える。一方、『「武士道」解題』は、執筆者の李登輝が、自らを「最も理想的な日本人と思う」²と語っただけのことはあって、日本人にもわかりやすく解説された、優れた入門書であったと筆者は感じた。

海外の文化人や政治家等が絶賛する「武士道」とは何なのか。「武士道」の何が現代人に受け入れられるのか。また、現代人が「武士道」に何を求めようとしているのか。それを探ってみたいと考えた。そのためには、「武士」誕生以前の日本人の生活にも目を向けなければならない。

2. 「武士道」とは何か

2.1 「武士」の誕生と台頭

平安以前、おそらく縄文時代には、自然や人と、狩猟や戦闘(侵略・防衛)を生業とした民がいたは

ずである。戦いのルールや共存のための礼儀等が子々孫々に受け継がれ、熟成されて、後の「武士道」へと発展していったことは間違いない。狩猟や戦闘(殺し合い)という「死」の領域に踏み込むことで、より崇高な存在(神)を認識するに至り、精神的にも形式(作法・礼儀)的にも、かなり高度なレベルに達していたとされる³。

そして、戦士を本分とする宗家の主人を頂点とした家族共同体の構成員として、朝廷から正式に認められた「武士」階級が、平安中期に誕生した。日本史における「武士」第一世代の登場である。以来、明治維新までの約900年間、時代の変遷に伴い、戦闘様式の変化に対応しながら、政治の表舞台に登場し続けてきたのが「武士」である。

「侍」は、今日では「武士」と同義として用いられることが多いのであるが、本来は「武士」と同義ではない。「侍」(さむらい・さぶらひ)は、特に上層の「武士」を指していたようである⁴。区別がわずらわしいので、使い分けせず、本報では、より広い意味の「武士」という語に統一して論を進めたいと考える。

「武士」は当初、天皇や貴族の警護や紛争鎮圧を任務とする階級であったが、平家の政権を経て鎌倉幕府の成立に至り、全国の軍事・警察を担う公権力に発展した。さらに、室町・戦国・安土桃山時代を経て江戸幕府成立に至る過程で、武士が担う公権力の領域は拡大し続けた。江戸時代以降は社会のすべてを覆うようになり、元来「武官」に相当する職務であった「武士」が「文官」として働くことが多くなった。

2.2 「武士道」をとりまく環境の変化

「武士道」の醸成過程もひとつの歴史であり、そ

の変遷は興味深い。以下に、中沢³が「武士道の考古学」と題して『武士道入門』（河出書房）の中で紹介している事例を中心として、年代順にあげてみる。

1. 狩猟民の作法

縄文時代には、自然や隣人（敵、味方）との接触が常であり、「生活の知恵」が必要だったのである。自然の領域では、高い倫理性と行動ルールを保たない限り、狩猟行為は破綻を来す厳しさがあった。そのため、戦った相手（自然、動物、人）の生命力を自分のものとするための礼儀や儀式をつくり、伝え残してきた。このような行為を伝統にまで高めるには、相手に対する尊厳の心がなければならない。この狩猟民の精神性（魂）が、そのまま「武士道」の源流となったと考えられる。

2. 東国武士と西国武士

地方の狩猟民のリーダーは豪族となり、平安後期からは武士団を形成するようになる。これは、関東・東北の地に強力に形成されていった。武士団では、「死」とどうわたり合うか、主従関係をどう結ぶかが決められていくことになる。手柄に報償を与え、次の機会に恩に報いるという主従関係をベースとして、「武士」の原始的倫理観が形成されていった。

西国の武士も、関東の狩猟民を土台に発達してきた地方武士団と良く似た行動様式や、倫理道徳が形成されていったが、あくまでも西国のそれは、都の中で形成されたもので、大自然を相手にして育んできた東国武士のそれとは、そのルーツにおいてかなり違いがあったと考えられる。

3. 前九年（1051～）・後三年の役（1083～）

この戦いは、宮廷警備の武士たち（西国武士）がリーダーとなって、東国の地方武士団を巻き込んで、秋田・青森を中心に大きな勢力となっていた豪族を平定するためのものであるが、西国の武士たちは、この勢力と激突してかなりの苦杯をなめている。別の豪族の力を借りての辛勝である⁶。この過程で、西国の武士団に、戦闘方法や倫理観について、新しい考え方が形成されるきっかけとなったのである。特に源氏は、東国の武士との接触が非常に強かったとされる。

4. 源頼朝の登場

西国出身の頼朝は、貴族の血筋に連なるが、平氏によって伊豆に流され、そこで在地の武士団に守られて成長を遂げている。この時期の東国には、北条氏や比企氏などの有力な武士団があり、彼らが頼朝を棟梁として担ぐことによって、平氏への対抗、さらには政権奪取が画策された。そして、

十分ではなかったにしろ、東西武士団の精神的な融合が行われ、「武士道」の最初の原型が作られたと考えられる。

その後、頼朝が後白河上皇から征夷大將軍の院宣を受け、東国の支配者になると同時に、全国の守護地頭の任命権を与えられ、実権を握り始めた時期に行った「富士の巻狩」が大きな意味を持つとされる。東国武士の棟梁でもある頼朝は、富士の深い森の中に生息している猪や鹿を狩人として追い・仕留める狩猟民として、また、自然の支配者としての権力の根源を示し、西国武士の象徴である天皇制に対抗しようとしたのである。

また、この前後からの戦闘が契機となって、所領の分配という経済行為に拠る一方で、「死」の世界に踏み込みながら、「武士」としての様式を保つことを自らの権力の根源とする、「武士」の生き方が体系化された。

4. 楠正成と中世の「武士道」

東国武士団には、戦いに対する独特の様式が残っていた。戦闘の前に自分の系譜を述べ、自分を守っている神々の名前を述べて名乗りをあげ、そして相手方から自分と一騎打ちを望む武者が現れたときに、はじめて馬上での太刀の浴びせ合いから組み討ちになり、地上の乱闘に至る。その一騎打ちを両軍が見守っていた。それから矢の射かけ合いが起こったりしながら、集団による戦闘が始まるという、きわめて儀式的・宗教的な側面を残した戦闘が、東国で踏襲されていた。つまり、古代的な戦士の戦争哲学というものが東国の戦争の中にはまだ生き残っていて、それが彼らの戦術の中にも、生き残っていたということである。しかし、西国武士はこの戦法を全く無視した。西国武士団には、山岳民が多く、正規戦よりゲリラ戦法を得意としていた。その代表が楠正成である。彼の戦法は、東国武士団から見ると卑怯この上ないので、奇襲戦法を得意としていたのである。東国武士が名乗りをあげているところへ平気で矢を射かけるなどしたため、東国武士もようやく、西国武士はルールを持っていないことを認識した。以後の戦国時代で尊重されたのが楠正成の戦法であり、鉄砲伝来による戦闘法の一変、軍の統制違反とみなされる一番槍や一番駆けなど、儀式的な中世の「武士道」は崩壊していったのである。

5. 利休の死（1591）

長く続いた戦国時代の戦場に新たな精神性が現れてとれる。武士に同行して戦場へ行き、そこで戦死者の埋葬などを行う僧の存在がある。それに際

して発達した精神的な作法が色々あり、その最高のものが「茶道」であった。戦場へ同行して出陣前の武士に僧が茶をたて、武士は「死」を前にしながら一服の茶を飲むことがひとつの儀式へと発展した。この儀式が、「武士」誕生前から生きてきた、「死を直前にして、力を激突させる空間の中でいかに様式美を持続させるか」という美意識が最も発達した形態と考えられる。茶道や華道など、戦国時代に発達した芸能・文化の多くが、後々の「武士道」形成にとってきわめて重大な意味を持つものとなっている。

その茶道を大成した利休が、秀吉に切腹を命じられるのであるが、秀吉がこれ以前にどのような政策をとっていたかを考えれば、利休の切腹の意味と、その後の「武士道」への影響がわかる。秀吉は全国に海賊停止（ちょうじ）令（1588）と喧嘩停止令（1587）⁶を出す。これは、海と陸での戦闘を全面否定するものであり、基本的には平和が実現してしまう。これにより、海や山を舞台に展開した狩猟をベースにした文化は根源的に否定され、武士団の自治による決定権も奪われた。これは、「武士」たちが依拠してきた根源のすべてが否定されたことを意味する。利休の茶道は戦場で発達し、当時の武士世界での精神性の最も高い表現として行われていたものであるが、利休の切腹は、それまでの「武士道」を完全否定されたことの象徴であり、「武士道」の前半史が終ったのである。

6. 刀狩り令（1588）と貨幣経済

戦国時代に秀吉が全国至るところで行った「刀狩り」によって、「武士」は農村を追われ、城下町へ生活の場を移さざるを得なくなった。かつて武士団は、農村や海や山を拠点として生産しつつ消費する存在であったが、これにより、完全に消費者になった。名目上は「武士」の給料計算はまだ米であったが、実際はそれに相当する銭が支払われており、米経済という表向きの体裁をとりながら、実際には貨幣経済が行われていた。

そこで、「武士」は、農民の支配者として君臨する支配構造を作り出したのである。そして、農村から都の住人へと変貌を遂げた「武士」が、自らの精神のよりどころをどこに求めるのか、言いかえれば、「武士道」をどのような形態に展開していったらいいかという問題が、支配階層である「武士」たちに突きつけられたことでもある。

7. 儒学の倫理

戦国武将は戦士であると同時に政治家でなければ

ばならなかった。その武将は、先祖代々の威光によるものではなく、実力での上がることのできる地位であった。このことは、「武士」一人一人に、学問の素養を強いるようになったのであり、神仏なのか朝廷なのか、いかなる権威を背負っているかを明らかにしなければならなくなったのである。戦国武将が、京都朝廷と結びつこうとした背景には、朝廷に対抗できる権威を、神仏による理論体系に見出すことが困難だったからに他ならない。しかし、鎌倉・室町と続く三百余年の武家政治の中で、朝廷政治が空文となってしまう、「武士」「武家」は、新しい具体的・現実的な理論体系が必要となったのである。そこに「儒学」が登場する。有力な武家には、独自の「家法」なるものがあり、内外の様々な学問の要素を組み合わせ、「武士」「武家」の権威を示そうと試みられていた。その中に、個人の道徳的修養を尊ぶ「儒学」がおおいに取り入れられた。徳川幕府は「儒学」をもって「武士」の日常生活にひとつの規範を作り上げようとしたのである。

彼岸（あの世）に最高の価値を見出し、此岸（しがん＝現世）を「仮の世」として軽視する仏教を、儒家はおおいに排撃した。「武士」の日常生活では、「修身」「齐家（せいか）」「治国」「平天下」という順序であり、まずは身を修め、家を斉（ととの）えなければならなかった。ここでは、「君臣」「父子」「夫婦」「兄弟」「朋友」の五倫といわれる人間関係が確立していかなければならず、それを確立する精神の根本が五常、「仁」「義」「礼」「智」「信」である。儒家は、君臣、父子などの間にある主従関係や上下関係が絶対的なものであると説き、徳川幕府の封建制の維持にとって非常に都合が良かったのである。

儒教の倫理はあらゆる方面に浸透し、「武士」の生き方としては、戦場における「武士」の働きをも日常的な倫理の規範で割り切ろうとしたのである。しかし、これを潔しとしなかった旧「武士」の多くは、浪人することになる。浪人後、学問に打ち込んで、方向転換する者もいた。後に「士道」を体系化した山鹿素行もその一人である。

2.3 「士道」の体系化

ここで、赤穂浪士ゆかりの、山鹿素行が登場する。素行は会津に生まれたが、後に江戸へ行き尼僧に育てられながら、九歳で儒家の林羅山から直接指導を受け、儒学のほか「軍学」「神道」「仏教」などあらゆる学問に身を投じた。やがて素行はよりどころと

なる儒学、特に朱子学に疑問をもつに至る。静的な思考方法を重要視する朱子学に対し、「軍学」は、いかなる変化にも応ずるといふ動的思考でなければならぬとし、後に山鹿流軍学といわれる体系をまとめた。この軍学は、平時における「武士」のあり方をも明らかにしたのである。

素行の疑問は、現実と学問研究の間の矛盾であった。そこから素行は、「武士」の存在を次のように理論づけた。農工商の三民は、その日々の職業に追われて、人の道をふみはずすことがある。人の人たる道（人倫）が乱れたならば、この世の秩序は成り立たない。その人倫を正しくして、それが乱されるようなことがあれば、これを正すものが必要である。その任務にあたるのが「武士」であると説いた。「武士」を、三民を導く指導階級と位置づけたのである。

3. 考 察

日本人の意識や思想は、独自の風土によって作り出された、世界的にも特異なものと考えられる。四季の移り変わりを経験し、自然と折り合いをつけて生きてきた民族であり、理論的であるよりは情動的・直感的であること。個を主張することを避け、共同体の秩序を重視することなどが、日本人の意識や思想の特色としてみることができ⁷⁾。

「狩猟民の生活の知恵」からスタートした「日本人の精神文化」のひとつは、800年近くの年月をかけて、特別階級（指導階級）のための生活規範という位置づけにたどり着いた。その実践者は、広く各階層に広がっていたわけではなく、江戸時代に限っていえば、「武士」は6%に過ぎない。一握りの指導階級のための生活規範が「武士道」であった。この生活規範は、庶民からもかなり支持されたように思われる。その背景には、勧善懲悪、人情、礼など一般庶民にも受け入れられる思想が盛り込まれていたことがあげられよう。そして、その強烈な実践者が日本史に登場し、その武勇伝や美談が語り継がれ、浸透していったためと考えられる。

しかし、日本人の意識や思想の特色から見て、徳川幕府が儒教をもって作り上げようとした「武士」の日常生活の規範は、「戦場よりもまず理屈」という、日本人にとっては、相容れない思想がベースとなっていた⁸⁾。やがて批判が出てくるのは、当然のことである。山鹿素行の「士道」は、その批判に応える形でまとめられたものであり、新渡戸の「武士道」も、この流れを汲むものとして紹介されている。

1899年、アメリカで外国人向けに出版された

『Busido, The Soul of Japan』（『武士道—日本の魂』）は、アメリカ大統領セオドアルーズベルトを感動させ、日本びいきとなった大統領は、日露戦争の調停役を引き受け、戦争終結に成功するのである。一冊の本が敗戦色濃かった日本を救った⁹⁾。

4. ま と め

縄文時代から江戸時代まで、「武士」を追ってみたが、その底流に流れるのは、あくまでも日本民族の独自性である。日本人の意識や思想は、古い層の上に、次々と新しいものが積み重なり、重層をなしているのが特徴である。「武士道」はまさに日本人が、外来の文化と日本独自の文化を巧に融合させ、日本の土地、気候等に立脚した、自らの魂によってつくり上げてきた思想、文化であると評価する。自然とのかかわりを薄くしてきた近代の教育や、日常生活のありようは、日本人本来のありようではない。大きな課題である

一方、歴史の中で、「武士」が決して避けずに見据えてきたこと。それは、「死」に対するアプローチである。日本の「武士」は常に「死」と向き合っ

て日常を生きてきたし、そこに、三民からの尊敬を受ける崇高さを自然に表出させていたと筆者は考えた。国家を支えるべき人々（指導階級）の公の精神がレベルダウンしたことに対する国民の嘆きが、湧き出してきたことと、自然に帰れといにしえの「武士」が訴えているようにも思える。

参考文献

- 1) 藤原正彦：「新渡戸稲造『武士道』は魂の書」、文藝春秋、2004.5、文藝春秋社、pp. 269-273
- 2) 清水勝彦：「武士道が混迷日本を救う」、週刊「アエラ」、朝日新聞社、2003.9.8、pp. 52
- 3) 中沢新一：「武士道の考古学」、『武士道入門』、河出書房、2004、pp. 18-32
- 4) 「日本語源大辞典」、小学館、2005、pp. 564. 567
- 5) 新野直吉：「なるほど秋田の歴史」秋田魁新報社、2003、pp. 76-79
- 6) 池上裕子：「織豊政権と江戸幕府」『日本の歴史』15、講談社、2002、pp. 221
- 7) 「ワイド倫理」、東学、20024、pp. 61
- 8) 奈良本辰也：「武士の道」、アートデイズ、2002、pp. 69-71
- 9) 岬龍一郎：「新・武士道」、講談社、2001、pp. 38-39